
日々、頭に浮かぶ世界の風景

西野了

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日々、頭に浮かぶ世界の風景

【Nコード】

N2173F

【作者名】

西野了

【あらすじ】

僕は日常生活の中で、様々な風景に出会う。それは寒々としたものだったり、胸が温まるものだったり、怒りに満ちたものだったりする。それら、ひとつひとつを集めて、僕と言う総体があるのだ。だが、その僕自身である総体も常に移動し変転する。だから世界の風景も相対的なものだ……。僕はそう思う。

筆記用具

「筆記用具」

僕の机の上にある筆入れに、ボールペンが何本あるか数えてみた。9本もある。そのうち水性ボールペンが3本。ちなみにシャープペンシルは3本。他の部屋にも何本があるので、我が家には相当の数のボールペンやシャープペンシルが存在する。

僕は事務的な仕事もするので、筆記用具は欠かせない。しかしここ10数年来、筆記用具を買った記憶はない。けれども時が経てば経つほど、ボールペンやシャープペンシルは増えていく。カール・マルクスの資本論ではないが、筆記用具というものは自己増殖するのだろうか？ 答えは「否！」である。朝起きていたら、三菱ボールペンが子どもを生んでいたという場面に出くわしたことはない。それでは、サンタクロースや家族がプレゼントをしてくれたのであろうか？ この答えも「否！」である。2年前、次女が誕生日に1本シャープペンシルをプレゼントしてくれたが、それ以外は記憶にない。それでは、なぜボールペンやシャープペンシルが知らない間に増えていくのであろうか。それは、僕がものすごい田舎に住んでいるからだ。なぜものすごい田舎に住んでいるとボールペンやシャープペンシルが増えるのかというと、葬式が多いからである。

若干、論理が飛躍したようなので、もう少し丁寧に説明しよう。わが国において、ものすごい田舎といえば、犬も歩けば年寄り当たるほどの超高齢化社会を意味する。だから毎月、地域で何人かのお年寄りが亡くなる。田舎のすごいところは、顔と名前がほぼ一致する。とくに、我が家ではしっかりものの母が健在なので、僕や妻が知らない人でも、母にとってみれば知っている人だ。それから、またまた田舎のすごいところは仕事よりも葬式が大事ということである。だからお葬式にはきっちり出席するか、参加できない場合は人に頼んで香典をわたす。すると当然香典返しが来る。少し前までは、香

典返しとして、ハンドタオルとか香典袋（数枚入りセット）とかが多かったが、香典返しに香典袋を貰っても、たまる一方である。いったい何人葬式をすればなくなるかと言いたいくらいたまる。そこで、最近は香典返しに、ちょっと洒落たボールペンやシャープペンシルをつつむ人が多くなった。ということ、ものすごい田舎では知らず知らずのうちにボールペンやシャープペンシルが増えるという、いわゆる「過疎地における筆記用具の増殖過程」を無事説明することができた。

ところで、ボールペンはペンの先端が小さなボールで、それが回転してインクを適量出すのだということを知ったとき、あなたは感動しなかっただろうか？僕は「おおっ！」と少し感動した。しかし、ボールペンで記述しているとき先端のボールがくるくると回転していると感じる人がいるのだろうか。ほとんどの人が普通のボールペンだと、まず感じることはできないであろう。地球がものすごいスピードで回転しているのに、それを感じることができないことと同様である？人間の感覚は、きわめて限定された範囲でしか機能しないのだ。ところが、僕の場合、お気に入りのボールペンで書いているとき、それを感じることができると、うなづいて、気がする。

そのボールペンとは「三菱ユニLakubo 100」である。僕は三菱ボールペンには何の義理もないが、このボールペンは非常に書きやすい。このボールペンだと字がうまく書けるような気がする。大事な書類を書くときは必ず「三菱ユニ」を使う。ゆえに僕の筆記用具の中では、「三菱ユニLakubo 100」がNO1と思われるかもしれないが、実は違う。心を込めて書く手紙などは、パソコンで印刷したものよりも、直筆で書きたいものだ。その場合「三菱ユニLakubo 100」ではなく、えんじ色の光沢が美しいパイロット万年筆「ECRINO」を使う。この万年筆を使うと、さらに字がうまく書けるような気がする。筆記用具は奥が深い。さてボールペン、万年筆について述べてきたが、それではシャープペンシルはどのように使っているのか。シャープペンシルはビジネス

ス手帳でメモするときを使う。メモなので、字の体裁にはこだわらない。こだわらないというよりは、どきどき何て書いてあるかわからないくらい汚い。愛用のシャープペンシルは「赤い羽根募金 共同募金」（ピンク色）もらい物である。蛇足ではあるが、シャープペンシルは行政の外郭団体の名前で、やたらもらってきた記憶があるが、最近は財政逼迫のあおりを受けて、その機会が減ってきたような印象を受ける。残念だ。

ここ数年、文書処理はパソコンを使うことが多くなってきたが、やはり日本は紙の文化である。日本人なら紙に字を書け！なのだ。そこで、今年の正月の年賀状、少しは筆で書くべしと筆ペンをとったが、あまりの字の下手さに1枚でやめてしまった。筆記用具に愛着があっても、字が下手だと彼らに申し訳ない気もしないでもない。

坊ちゃん電車の猿

赤いバラの飾りの付いた黒い帽子をかぶった老婆は、車内に響き渡る声で喋っていた。彼女のあごはたるみ、目は黒目しかないように小さい。笑うと、線を引いたように、顔中にしわが浮き出る。赤地の白玉模様のネツカチーフを首に巻きつけ、両手の中指には、くすんだ銀の指輪が食い込んでいる。コートは初春に合わせたのか、落ち着きのない緑色だ。

僕は、離れた席からぼんやりと、その老婆を見ていた。ふと、その老婆と目が合った。彼女は上唇をにと吊り上げた。黄色い汚れた牙が見えた。

「猿？」

（猿と目を合わさないください。襲ってきますよ！）周防猿回しの人と言った言葉を思い出し、あわてて目をそらした。しかし、その老婆の姿をまねた猿は、すでに空中を舞い、1秒後には僕の首筋に食いつこうとした。僕は恐怖のあまり目をつぶり、体は硬直した。

「キーキーツ」

僕の頭上から哀れな声が聞こえ、見上げると屈強な車掌が猿の襟首を摘んでいた。車掌は慣れた手つきで窓を開け、ぽいっと猿を放り投げた。

地面に着地した猿は、帽子とネツカチーフとコートを急いで脱ぎ、面倒くさそうに指輪もはずし、山に向かって駆け出した。

車掌は僕に「坊ちゃん団子」の入った箱を渡し、低い声で謝った。「春になると、猿にもおかしい奴がときどき、出てくるのですよ。上手く化けるので、ほとんど気付く人はいないのですが。ここはひとつ穏便に」

僕は、スリルと団子には目がないので、分別のある表情で頷いた。

公務員の独り言

この社会は、人間の頭が作ったものばかりだから、すべて虚構だ。意味のあるものなんか、本当は何もないと僕は思っている。生きていく上で一番必要なものは、もちろん金だ。

僕は公務員だが、役所に来るやつは、ほとんど馬鹿ばかりだ。役所に来たって、金が儲かるはずもないし、大体貧乏人はどうしたって貧乏から逃れられないものだ、僕の短い人生経験でも分かる。そして、金持ちは何もしくたつて金が入ってくる仕組みになっている。僕の担当部署は福祉関係だから、頭の悪い、貧乏人ばかりがやってくる。業務上親切に対応しているが、こいつらは一生浮かび上がれないと思う。先を読むことを知らないのだ。自分の置かれている状況をまったく理解していない。安定ばかり求めたって、世の中、確かなものなどひとつもないのだから、自分の身は自分で守れよと言いたくなる。国や地方の財政状況を見れば、おのずと答えが出てくるのに。この国はヨーロッパの福祉国家とは違うということ。なぜ分らないのだろう。まあそんなことをいちいち気にしていたら仕事にならないし、苦情処理だけでも大変なのだから、変な同情心を起こせば、自分自身が回らなくなる。公務員に必要なものは、想像力をもたないことだ。このことを僕は職場で学んだ一番のことだ。スムーズに仕事をするには、善悪ではなく、必要かそうでないかを瞬時に判断することだ。だいたい、物事の善悪の基準ほど曖昧なものはない。同じ神様を信じていて、平気で殺し合いをしているじゃないか。一応、法律とか規則とかあるけど、そんなもの破るのは日常茶飯事だし、ドストエフスキーだったか、有名な作家が言っていたが「人間は罪を犯したいものだ、法を破りたいものだ」と。

何かの折に思い出す出来事がある。

冬の寒い朝だった。勤め始めて一年目のことだ。お気に入りの喫茶店でモーニングを食べて出勤しようと、歩いていると白装束の老人が倒れていた。四国のお遍路さんの格好のようだったが、詳しくは覚えていない。短く刈り込んだ髪の右側から少し血が流れていた。『……………』

僕に何か言ったようだった。おそらく、助けをもとめていたのだろう。僕はしばらくその老人を見ていたが、そのまま通り過ぎて、いつもの喫茶店に入り、モーニングセットを注文した。そして、スポーツ新聞を読みながら、トーストを食べ。ゆで卵を食べ、サラダを食べ、熱いコーヒーを飲んだ。その間、倒れていた老人のことは思い出さなかった。そして、そのまま定時に出勤した。

翌日、新聞の地方版を読んだが、老人の行き倒れの記事はなく、職場でもそのことについて、何も話されなかった。おそらく、誰か他の人間が手当てをしたか、救急車を呼んだのだろう。そして、大したこともなかったのだろう。僕が助けなくても、誰かが助けたということだ。

どうして、僕はあるとき、あの老人、血を流していた爺さんを助けなかったのだろう。出血量はそれほどではなかったし、意識もあったのだが、彼は確かに僕に助けを求めている。

そう、僕は冷酷な人間なのだ。

罪を犯したい人間なのだ。

人が血を流している場面を楽しめる人間なのだ。

巡礼の覚悟をしている人間が、安易に助けを求める、その甘えた精神に唾を吐きかけては喜んでいいる合理主義者で、物事の本質を追求する詩人なのだ。

そして、職場の同僚には感じよく見られ、応対するお客さんには高感度抜群で、恋人にはとても優しい、まともな人間なのだ。

公僕Ⅱ公務員とは、そういうものだ。

道の駅の風景 狭い空

「道の駅の風景」

道の駅に着いた。そこは南国だった。4月というのに気温は26度を越えている。

道の駅といっても、駐車場は狭く、施設も古びていて、寄せ集めのまとまりのないスペースなのだ。

何かの植物展示会のようなものがあり、どこかの農業高校の生徒が駆りだされているのか、つまらなそうに受付をしていた。「日曜日なのに、どうしてこんなことしなきゃいけないの？」と女子高生は思っていた。100%そう思っていた。

のどが渴いた僕は自動販売機で缶コーヒーは買った。すると、その隣で、薄汚れた爺さんが空き缶を整理していた。いや、整理していたのではなく、チエックしていた。ジュースやコーヒーが残っていないかと。そして残っていた液体を飲んでいた。僕は恐る恐る、彼に気付かれないように、飲み干したコーヒー缶をゴミ箱に捨てた。それから野菜を買っていた妻のところに行くと、そこには酔っ払った爺さんが何か喋っていた。僕らに何か問いかけているようにも聞こえたし、独り言を言っているようにも聞こえた。僕らは、その酔っ払いを無視し、トマトを買った。

娘はたこ焼きを買ったが、食感が悪く、3個しか食べなかった。かつおぶしも青海苔もかかっていないたこ焼き。

僕らは、その不思議な空間で1時間過ごした。やけに現実感のない、場所と時間。そこは、違った世界だったのかもしれない。

「狭い空」

山の中に住んでいると、世界の行き止まりのように感じる。午後4時頃には、日が翳ってしまうので、夕焼けを見ることはない。

ときどき、広い平野に出て、顔を上げて、空を眺める。

広い……

世界はどこまでも、つながっている。

数年前、何キロも続く砂浜で、太平洋を見ていた。

波動は地球のエネルギーで、尽きることはない。

寄せては返す波

子どもらは歓声をあげ、ときどき大きな波が来ると、逃げ惑う。

深くて明るい夏の空は、この星だけのものなのだろうか？

真夏の空と光と雲と海と砂浜と風と潮の香りは、至福の空間と時間だ。

その1シーンは僕の脳裏に刻まれて、元気がないときや、冬の寒い日に引っぱり出している。

だが、僕の日常は、狭い空の下にある。

卓球 家にいる動物

「卓球」

娘と卓球をしていると、隣の卓球台のそばで5歳くらいの男の子が泣いていた。

どうやら負けたのが悔しくて、泣いたらしい。

若い父親は顔を真っ赤にして、怒っていた。

「負けて泣くぐらいなら、卓球なんかするなあ！」

若い母親も同じように、興奮して叫んだ。

「ほんとに、すぐビービー泣く子ね、弱虫！」

2人の大人は口汚く、わが子を罵っていた。

僕と娘はしばらく無言でゲームを再開した。

何だか楽しくなくなってきた。

帰り道、娘にさきほどの親子のことを呆れながら話すと

彼女は

「友だちのケイコちゃんの親もそうだって。遊んでいる最中に泣いたりすると、親がすごく怒るの」

と、静かに言った。

僕は曖昧に「ふーん」と答えた。

「家にいる動物」

僕の家は、山の中に建っているの、いろいろな動物が出現する。ペットも飼っていて、白内障の灰色老うさぎと、五月から我が家の一員となった雑種の白猫（見た目はきれいだが性格は粗暴）の一羽と一匹がいる。

さて、ペット以外の動物の話である。

初夏には裏庭に蛍が飛んでいるときもあるし、軒先にはツバメが毎年巣を作っている。このような状況だと悪くないだが、ことはそう好ましいことばかりではない。

以前裏庭でひきがえるを目撃したことがある。結構でかいやつである。こいつは図太いのか鈍いのか、人間が寄ってきてもぜんぜん動じない。棒切れでつんつん突いても知らん顔をしていた。たしかひきがえるは毒液をひっかけると絵本に描いてあったので、それ以上挑発することはやめたけど。

それから、ムカデである。こいつは僕が夜眠っていたときに、僕の体の上をざわざわと這ったのだ。それも顔の上だったので、反射的に払いのけたけど、刺されなくてよかったと本当に思う。このムカデも大きかったので、顔を刺されたら、お岩さんのようになったのではないかと思う今でもぞつとする。次の日慌ててバルサンを焚いたけど、ムカデの死骸はなかったような気がする。

次はねずみである。（その当時は猫を飼っていなかった）台所にねずみらしき糞があるので、ためにゴキブリホイホイのようなねずみとりを置いてみた。翌朝そのゴキブリホイホイもどきねずみとりを見てみると、瀕死のねずみが横たわっておりました。ハムスターやモルモットに比べて、いえねずみ（かな？）はぜんぜんかわいくない。ペット用のねずみたちは可愛がられて、いえねずみは処分の対象にされるのは何となく理不尽な気もするが、やはり処分してしまいました。

最後は蛇です。先日二階から降りてくると、「むにゅ」というこれまで感じたことのない妙な感覚があった。「まさか」と思って足を元を見ると、50センチくらいの黒っぽい蛇が困ったようにによろしていたのだ！我が家全員集合して、この蛇をどうしたものかと検討している間に、この蛇は階段の隙間から逃げていつてしまった。妻が職場の友人にそのことを話すと「私、そんな家には住めない！」と断言され、二重にショックを受けたとか。僕らだって、好きで蛇のいる家に住んでいるわけではないのだけど・・・

見た目ではわからない猫の性格

「見た目ではわからない猫の性格」

我が家では二匹目の猫を飼っている。娘が「心の癒しのために猫を飼って」という願いに答えるためだ。

昨年の5月、役場の支所に捨て猫家族が檻に入れられていた。親猫1匹子猫4匹だが、子猫はいずれも可愛いのだ。

そのうちの1匹を飼うことにした。全身雪のように白く、目は透き通った淡いブルー、品のある顔立ちで家族全員、「わー、かわいい」と大絶賛であった。

しかしこの猫は性格が悪かった。そして素行も悪い。やたら噛むのである。いわゆる噛む猫です。手首のところの服を噛みつつ放つ猫キックも強烈である。

今は太って身が重いのであるが、まだ身軽な頃はおばあちゃんの背中に飛び乗っては威嚇していた。猫に飛び乗られた（おんぶおばけみたいです）哀れなおばあちゃんは、夢に猫が出てきてうなされたそうです。

また、先日お風呂の浴槽を洗っていた妻がすっかり猫を風呂場に閉じ込めてしまったことである。（この猫はなぜか風呂場が好き）20分くらい立って解放されたのであるが、根に持っていたのか、しばらくして妻の腕をかぶつと噛んでおりました。

それから娘がふざけて猫をからかって遊んだ後のこと。いくら凶暴な猫でも人間にはかなわなくて、悔しい思いをしていたよう。娘が座っていると、やおらジャンプして頭に猫パンチを一撃くらわしたそうです。あなおそろしや、おそろしや……

可愛いときは朝起きて腹ペコで「ご飯をくれご飯くれ」と、ぐるぐる鳴いているときだけです。

娘も「この猫では癒しにならん！」と泣いておった。

しかし時の流れは猫の心をも変えてしまいます。避妊手術を受け、

近所の猫との縄張り争いに負け続けると、すっかりおとなしい性格になりました。お腹が減ったときや外に出たいときは「にやうにやう」と甘えた声を出し、久しぶりに家族と会えばのどをゴロゴロ鳴らす変貌ぶり……。外に強敵ばかりで友だちもいないので、何とかこの家に置いてもらわねば生きていけないと悟ったのかもしれない。

本当の音楽とは？ デイクター・ゴードン

「本当の音楽とは？ デイクスター・ゴードン」

僕はジャズも好きで、とくにモダンジャズのCDをちよくちよく集めている。長い間いろんなCDを聴いてくると、やはり自分の愛聴盤というものが出てくる。

最近よく聴いているのがデイクスター・ゴードンの「アワ・マン・イン・パリ」だ。精神的に疲れているときに彼のサクスを聴くと、何となく落ち着くのだ。

聴いても聴いても飽きない。

僕のCDはボーナストラックがなく5曲だけだが、よく続けて2回聴く。変な言い方だが、このCDはうるさくない。ゴードンのサクスもバド・パウエルピアノも音楽として十分機能している結果だろうか。

以前、管弦楽のトリオのライブでモーツァルトを聴いたときも、同じような印象を受けた。自分の感情とは別の次元で音楽が成立していたのだ。このとき聴いた曲はしらなかったのだが、よい演奏と素晴らしい作品というのは、そういうことは全く関係なく心に響く（ピアノ・ヴァイオリン・ヴィオラのための三重奏曲 変ホ長調 《ゲルゲルシュタット・トリオ》は入っていたと思う）この演奏会の後、僕の頭（脳？）がかなり軽くなったように感じた。頭全体を包むぼんやりした感じがなくなり爽快なのだ。これを「癒し」といつてよいのかわからないが、音楽に治療的効果があることを体験したわけだ。

ゴードンのCDも真剣に聴けば、ブrouするテナーサクに胸がドキドキ、バクバク、そしてバラードにはジーンときてしまうが、いい加減に聴いても、ちゃんと音楽に聴こえてしまうとは、すごいものである。

このCDは1963年の録音だが、ゴードンのようなジャズジャ

イアントがまだ他にもたくさん存在したというのは、音楽の神様の
気まぐれだろうか。それとも公民権運動の盛り上がりなどとも関係し
ているのだろうか？

老ウサギと性格の悪い白猫のいる日曜日

「老ウサギと性格の悪い白猫のいる日曜日」

昨日は僕の方が早く起きたのに、今日は妻が先に目覚め「早く起きて」とうるさく言う。僕が先に起きたときは、そんなことは言わないのに。どうして彼女が先に目覚めたかという、今朝は天気がいいからだ。

昨夜眠る前に飲んだビールとつまみの生協のチョコレートが胃に残っていて、食欲がない。それでもコーヒーを2杯飲み、トースト1枚、トマト1個、レタス2枚、ウインナー2本を食べた。僕は朝食をしっかりとるタイプなのだ。

BS放送では福留が出場しているゲームを放映していた。シカゴカブスの球場はものすごい。外野フェンスは枯れた蔦がびっしりと覆われている。日本だったら絶対に認められないだろう。試合の方はカブスがパイレーツを大差でリードしていた。福留は満塁のチャンスに押し出しの四球を選んで打点1、渋い働き。

快晴なので、ペットのウサギを裏庭に放つ。こいつはもう12歳くらいのよぼよぼウサギで、白内障のため目も見えない。体も硬くなって走ることもできない。（まっすぐ歩くこともできない）それでも食欲だけはある。よたよたと歩きながら、裏庭の雑草をむしゃむしゃと食べている。もう一匹、性格の悪い白猫も最近外に出ることを覚えて、家の近所をうろろしている。友達なのかライバルなのかわからないキジ猫（通称ワチユネコ）と対峙している。この白猫はずるくて、自分の家の人間が近くにいるときはワチユネコを挑発し、いないときは逃げまくるという技を持っている。

僕が2階の部屋で掃除機をかけていると、妻が下から「後でパンパンし」と言ってきた。洗濯物の皺を叩いて伸ばして干してほしいということだ。僕は洗濯物の皺伸ばしは好きではないが、洗濯物を干すことは結構好きだ。白いTシャツやカッターシャツが風

にゆらゆら吹かれているのを見ているのは、なかなか気持ちがいい。下着類やタオル、ズボン類などは見ていてもつまらない気がする。

（この日は都合4回洗濯物を干すことになる）

ときどき裏庭に出てよぼよぼウサギが大丈夫かどうか点検する。網かごを移動させて違う場所で草を食べさせているのだが、案の定ひっくり返って動けなくなっているときがあった。

夕食をとり、後片付けをしたらいつのまにか8時になっていた。珍しくNHK大河ドラマを観る。主演の宮崎あおいのおでこが面白いと妻はいつも言う。娘は鼻が面白いと言う。

よぼよぼウサギは自分の家に連れ戻され、うつらうつらしている。性格の悪い白猫も家のどこかで眠りをむさぼっている。

こうして僕の平和な休日終わるのだ。

偏食児童の憂鬱

僕は寒がり屋です。先日マッサージにいったところ（最近はおぐし屋っていうのでしょうか？ 看板にそのようなネーミングがあった・・・）スタッフの女性から、「足が冷えていますねえー」としみじみ言われてしまった。寒がり屋は寒さに弱いだけでなく、あまりに寒いとそれだけで疲れてしまうのだ！ ゆえに、僕のような寒がり屋にとって、冬の鍋物はなんとも嬉しいメニューなのである。鍋は暖まる。もうそれだけで幸せな気分になり、作ってくれた奥さんに「ありがとう」と殊勝にも感謝してしまうわけだが、昔は鍋が好きだったわけではない。いや、むしろ苦手なメニューだったのだ。日本人に鍋物が嫌いな人かいるのか？ と非難の目をむけられそうだが実はいるのである。偏食児童だった、わたくしです。

子ども時代の僕は非常に食べられるものが限られていて、家で水炊きをしてみんながわいわいと楽しそうに食べているのに、暗い顔をして鍋をつついておりました。食べられるものといえば、豆腐と白菜が少々、たまに牡蠣や貝柱ぐらいなもの。（他人から見れば贅沢なことですが、本人はつらかった）うちの家では、骨付きのかしわがメインで、この偏食児童は当時、鶏肉が苦手だった。しいたけも苦手だった。ねぎも苦手だった・・・（いったい何を食べて生きていたんでしょかねえ？）

ところが年を経るごとに味覚は変わるもので、今の奥さんと結婚した頃には、鍋が好きになっていました。また鍋といっても「しゃぶしゃぶ」「キムチ鍋」「寄せ鍋」などいろいろあるわけで、様々な種類の鍋物を食したことも、鍋物「水炊き」まずい！ といった固定観念も崩されていきました。そんなことも私が鍋好きに転向？ した大きな要因だったと思われませんか？

僕の住んでいるところは四国の山の中なので、おいしいしいたけが手に入ります。白菜と白ねぎとか豆腐とかさっぱりしたものがあれ

ば、歳のせいかなそういう食材で満足してしまいます。まあこれだと精進料理っぽくなるので、動物性たんぱく質の食材もなにか入れますが、最近は豚が多いような・・・ところで、うちの娘なんか白ねぎがおいしいと言ってるけど、むしろ食べているけど、自分のことも時代には考えられなかったの、なんとも不思議な食卓の風景に思えてしまいます。まあこれも狭量な性格であるわたくしの「ひがみ」なんでしょうけど・・・

小説を書く理由1

「ガールフレンドとサバイバルナイフ」その1

2008年7月1日、僕は日本文学館から「ガールフレンドとサバイバルナイフ」という小説を出版した。13歳の少年たちの目を通してこの世界がどのように見えるのか、僕自身考えてみたかったし、この不可解な現在社会に問題提起したかった。そして僕たちをとりまく世界が、3人の少年たちの物語として語られる結果となった。

暗い蒼色の背表紙に暗い赤の題字が浮き出ている文庫のカバーを見て、それでも僕は想うのだ。「僕はどうしてこの本を書いたのだろう?」と……

直接のきっかけは、この出版社に詩を応募して、「本を書いてみませんか」と誘われたことだ。自費出版中心の出版社らしいが、対応も丁寧で価格もリーズナブルだったので、書いてみることにした。当時、僕は何か自分で表現したかった。この本の著者プロフィールでも書いているが、2001年同時多発テロからイラク戦争に向けて世の中が騒然としている中、自分は何をすべきなのかわからなかった。しかし何かをしなければならないと、自分の内側から激しく欲するものがあつた。それが僕を苛立たせた。自動車のウィンドウに「NO WAR」のシールを貼つても、イラク戦争反対の署名をしても、全然満たされなかった。

思えば2001年の同時多発テロ以前から、世界は不穏な空気に包まれていた。アフガニスタン紛争、湾岸戦争……僕らの目の見える形で様々なことは準備されていた。レディオ・ヘッドのトム・ヨークはチベットにおける中国の弾圧をすでに糾弾していたし、アフリカの名前すらよく知らない国々では（それは僕の無知のせいなのだけでも）、ジェノサイドが行われているとメディアは伝えていた。

組織された物理的にも巨大な暴力は人々の目に晒される。ただ僕らの周りにも、人を死に至らしめ人格を再生不可能なまでに破壊させる、静かな暴力が存在する。僕はいつしかその存在に気づき、それらに対し憎み、怒り、敵対していた。僕が僕自身であるためには、世間の常識の裏側に貼りついている暴力と戦わなければならぬ。そして、それは僕一人で行わなければ、僕にとって意味のないこととなる。（なぜ一人で戦うかといえば、僕自身の偏狭な性格からくるものだ、たぶん……）

そのような意味で物語を書くことは、自分自身を取り戻せることでもあるが、無謀で危険な行為でもあった。僕のように精神的にも肉体的にも弱い人間にとっては、とくに。

けれども僕は書かざるを得なかった。物語は語られなければならなかったのだ。

小説を書く理由2

「ガールフレンドとサバイバルナイフ」その2

アメリカのブッシュ大統領がイラク戦争の終結宣言をしてからも、依然としてテロの黒煙は上がり続けていた。メディアは自爆テロで数十名死亡したと伝える。断続的にテロは起こり、それに合わせて死者数が報道される。そして、それが僕の日常となる。日常的に何の罪のない人々が殺され、その地に日本という国が関わっているのに、僕の心は麻痺していった。

しかし、僕はイラクで人を殺している暴力と日本の社会に潜んでいる暴力とは繋がっているのではないかといっしょに感じるようになった。僕の周りには、他者に対する無関心が、弱いものを蹴落とす空気が、一般常識という強者のイデオロギーが、傷ついた者を徹底的に攻撃する。ある場合には、心優しく繊細な者の精神を破壊し、肉体を滅ぼす。

大人たちの暴力は子どもの世界では無軌道なほど膨張する。

いじめることは自分を守るため。

学校に行かないのは、殺されないため。

ノリのいい馬鹿笑いとマシンガントークは他者からの防波堤。

静かな暴力と圧倒的な破壊活動は、忙しさに飲み込まれている大人たちの目を欺くことは容易い。

自我を確立しようと、じたばたもがいている繊細な（ある意味むき出しな）感性はすべてを真っ直ぐ受け止めてしまう。美しい言葉に塗り固められた嘘を、暖かそうな笑顔の中の冷酷な眼差しを・・・

僕が若かった頃思い浮かべた世界と、なんとかけ離れた現実なのだろう？

少年たちは、まだ希望と呼ばれる言葉を失ってはいないのだろうか？

僕は彼らの物語の世界に降りていかなければならない気がした。
僕はその世界を前にして、立ちすくみ、躊躇し、逃げ出そうとした。

その世界は罪のない血が流される、死と生が分かちがたく結びついている場所だ。

だが僕には語らねばならないと思った。その風景が見えるのであれば、語る義務があるのだ。

小説を書く理由3

「ガールフレンドとサバイバルナイフ」最終章

少年たちはなぜナイフを手にするのだろうか？

ナイフを持つことで万能感を得るからだろうか。それもあるだろう。しかしそれよりも、彼らはナイフを持たざるを得ないのではないか。モタザルヲエナイ……

「世界は暴力と破壊と絶望の深い闇に閉ざされている」

少年たちの世界は理不尽な暴力に満ち溢れている。

あるときは母親の冷たい視線が彼らの胸を深く抉る。

あるときは教師の無神経な一言が絶望の淵へ突き落とす。

またあるときは、ともだちの「ちよつとしたからかい、軽い気持ちのイタズラ」が、負のスパイラルの入り口に誘ってしまう。

少年たちは世界の崖っぷちまで追い詰められている。

常識を刷り込まれた傲慢な大人たちには、血の涙を流している少年たちを見ることがなどできるはずもない。

少年たちは凄まじい暴力と巧妙な偽善から身を守るためにナイフを手にする。

「本当はナイフなんて持ちたくないのだ！」

傷つき、怯え、疲れ果て、悩みに悩んで、どうしようもなくついにナイフを手にする。

彼らを覆っている闇を切り裂き、新たな光を求めるためにナイフを手にする。しかしそのナイフが更なる暗黒の虚無に繋がる入り口の鍵となるかもしれない。

少年たちにナイフを手渡したのは、この歪んだ世界をつくりあげた大人たちなのだ……

彼らはそれでも生きようとしている。

僅かな光を求めて、信じることのできる人を求めて。

そして、許してくれる人を求めて・・・・・・

その行為は絶望的な戦いなのだろうか？

その温もりは幻想なのだろうか？

悲しい鍋、苦しい鍋

「哀しい鍋と苦しい鍋」

20年以上前のことだけど、僕は京都に住んでいた。福祉関係の仕事をしていたのだが、同じ職種の仲間と忘年会をやるうということになった。当時みんな貧乏で、会費は3000円ぽっきりで、忘年会なので鍋（？）ということに決まった。たまには変わったものが食べたいということで、それじゃあ「かにすき」はどうだという意見が出て、みんな「おーっ、それはすごい！」ということで、「かにすき」に決定した。

賢明な読者諸兄はこの時点でお分かりかと思うが、貧乏な青年福祉労働者は無知なのである。20年以上前とはいえ一人3000円の「かにすき」とはどんなものであるか？その鍋を見たとき、僕らは言葉を失った。

「蟹が、な、な、ない・・・」

「ホント・・・」

鍋の中には数本の貧相な蟹の足があり、白菜、ねぎ、しいたけ、豆腐がお茶を濁していた。そのときの味は覚えているはずもなく、逆上したわれわれは居酒屋で痛飲したのである。これが「哀しい鍋」の物語である。

もうひとつの「苦しい鍋」の話をしよう。

この話は最近のことである。

おとしの3月末に山口県の湯田温泉に奥さんと二人で旅行した。山口県といえば「ふく」！インターネットで方々検索し、安くて美味しそうで小奇麗そうな旅館を予約した。（僕の奥さんは美味しいものを食べる事に関しては、異常に頑張る人です）期間限定の「ふく」のコース（大特価）をゲットしたわれわれは（奥さんと僕ですが）西の小京都と呼ばれる山口市を目指したのです。

ところで、その「ふく」のコースは創作料理で、だから和洋混合

で、それで途中でステーキも出てきたんよ。（山口弁です）大変美味しかったのだけど、量がすごい。途中のステーキでお腹がいっぱいになってしまった。まだ「ふく」をほとんど食べていないのに・
・どーするんだ？

しかし、うちの奥さんはこのような状況で異常な力を発揮する人だった。以前北海道のすすきのに飲みに言ったとき、（これも20年以上前のこと）おつまみの量が大変多くて、それを見ただけで食欲をなくした僕を尻目に完全制覇した強者です。

今回も「もつたいたい！」の一言で、ふくさし、ふくちり、ふくぞうすいを完食！ 私も彼女の気迫の巻き込まれて、うんうんと唸りながらも、同じく完食。美味しいけれど苦しい鍋の物語でした。

最後に一言、旅館の夕食はどうしてひとり分が3人前くらいあるのでしょうか？ 謎ですね。

老ウサギと裏庭でぼんやりする

僕の家には小さな裏庭がある。

特に手入れをしているわけではないので、いろんな雑草も生えている。

その小さな庭にも木は植えてある。クマの木は高さ3メートル以上あり、庭一番の太木だ。その他に紫木蓮、楓、金木犀、ナンテンが植えられている。

ところで最近初めて見た花は、楓である。楓の花は葉っぱの下で開くのだが、紅色の花びらが2枚（だと思う）、蝶が羽を広げて葉の上で休憩しているような感じで雅に咲いている。49年生きてきて初めて楓の花を見た！と感動したのだが、一方で自分はこの歳まで何を見てきたのだから？という気がしないでもない。（後からわかったことだが、これは花ではなく実だとのこと。しかし、どうみても花のような気がするのだが……）

雑草もいろいろ生えていて、羊歯のようなもの、小さな笹、野バラっぽいもの、三つ葉、などなど名前を知らない草があちこちとしぶとく生きている。実は僕はそんな雑草が結構好きである。地味で謙虚・・・そんなところがいい。雑草といっても、タンポポやユキノシタ、サクラソウ、などは美しい花を咲かせてくれるので、観ている非常に得をした気がする。今年はサクラソウの当たり年で、溝の端まで可憐な花を咲かせてくれた。

さて、この庭は今年12歳の老ウサギ、らぶが育ったところでもある。

らぶは12歳なので、白内障のため目が不自由、筋肉が衰えたのか関節が硬くなったのか真っ直ぐ歩くこともできない。（いつも左側に傾いてよぼよぼと歩いている）若くて元気な頃は、この庭で放し飼いにすることはできなかった。当時は地面に金網の檻を直接置いて、その中にらぶを入れ、脱走させないようにしていた。放し飼

いにすると、文字通り脱兎のごとく逃げるのだ。

しかし、今は耳を触覚がわりに、よろよろよたよたと歩くしかない
ので、放置しても大丈夫だ。うぶはオス彼は鼻をくくんくんさせながら雑草をむ
しゃむしゃ食べたり、マーキング？のためにおしっこをしたり、そ
うかと思うと突然停止してぐーぐー眠りこけたりと、見ていて飽き
ない。彼を見ていると、自然とまわりの草や木にも目が行き、20
分30分はあつという間に過ぎていく。楓の花を発見したのも、ら
ぶといっしょにいたときだ。

娘曰く「ウサギ小屋にいるときは、耳が垂れているけど、庭にいる
ときは耳がピンと立っているんで、庭にいる方が嬉しいのでは」と
のこと。ときどきアナウサギの遺伝子が命令するのか、地面を前足
の強靱な爪でがっがっがっ掘っている。

ウサギは脳が小さいためか、らぶが猫や犬のように何かを深く考え
ていることはほとんどないと個人的にそう思う。食べること、寝る
こと、排泄すること、子孫を残すこと、ジャンプしたり走ること・
・ウサギの人生はシンプルである。

らぶは一度お見合いをしたけどうまくいかず、結局子孫を残せなか
った。妻は「らぶの人生楽しかったのかなあ？」と言い、母は「こ
れだけみんなに可愛がられて、よかったのでは」と言う。しかし本
人はそんなこと、どうでもいいといった雰囲気だ。まわりがどうあ
ろうが、自分は自分のことで精一杯です！そんなところがまた、ウ
サギがペットとして愛され続ける人気の理由でもあるだろう。人生
に疲れたら、ウサギを飼ってみればいいのではと思う。

家族からひんしゅくをかう猫

我が家の猫は五月に飼われ始めたので「めい」（メスで避妊手術済み）と命名された。この雌猫の素行に問題があることはたびたび述べてきた。

先日も裏庭で12歳のよぼよぼうさぎの面倒をみていると、めいが隣の庭の境目で居心地悪そうに佇んでいた。どうしたのかなと辺りを見回すと、通称「ギャング」（白地に黒ぶちのちよつと強面のネコ）が物置倉庫前にドーンと座っていた。めいはギャングにびびって、自分の好きなところ（倉庫の前）をとられてしまっていて、困っていたのであった。

私の姿を見つけると、「ウニヤ」と言っ、偉そうにギャングの前に進み出た。私がめいと一緒にいるのでギャングは渋々その場を離れた。するとめいは「ウーッ！」とギャングを威嚇した。そして寝転んで背中をこしこしと地面にこすってみたりしてギャングを挑発するのだ。まさに虎の威を借るめいである。

私は少々あきれてその場を離れると、めいは状況が変わったと察知したのか、ギャングに向かって「ニヤーン」と甘ったれた声を出したのであった。

そのことを家族に話すと、妻も娘も「情けない！」と言、めいに軽蔑の眼差しを向けるのだが、めいは我関せずと知らん振りをしている。

めいの前にまるとい雄猫を飼っていたが、彼は弱いくせに自分のテリトリーを守ろうと外敵に果敢に立ち向かい、怪我をしては帰っている猫であった。当時、家族のみんなは、「こんなにひどい怪我をするのだったら、戦わなければいいのに」と彼を諫めたのだが、まるは戦うことを止めようとはしなかった。

そんなまるのイメージが家族に残っているので、みんなは要領よく立ち回るめいに対して時折冷たい視線を投げかける。だけど、め

いは全身真っ白なふわふわな毛に覆われており目は澄んだブルー。
見た目は可愛いし、なおかつ甘え上手なので、ついつい可愛がって
しまうのが猫好き人間の性^{さが}なのだ。そして彼女もそのことがわかつ
ているのではないかと、家族の者は疑っている……………

ペットうさぎの死

家で飼っている12歳のウサギが死んだ。

ウサギは平均寿命が10歳前後ということだから、12歳だから天寿をまっとうしたというところだろうか・・・

このウサギの兄弟が5、6匹いたのだが最後まで生き延びていたのが我が家のウサギだった。

白内障で2、3年前から視力がほとんどなかったのに、よくここまで生きてくれたというのが率直な気持ちだ。若い頃は脱兎のごとくという形容がぴったりの素早い動きをしていたのだが、歳をとると落ち着くのはどの生物でも同じである。（もっとも最近はお人になっても、総理大臣というかなり責任のある仕事を嫌になつてやめてしまふ、精神的に未成熟で落ち着きのない人もいるが・・・）

このウサギは目が見えなくなつてから、鼻と耳をたよりに生きてきたわけだが、以前のようにダツ！と駆け出すことはなくなつた。（しゃれではない）そのために裏庭に放しがいにしても逃げ出すことがないので、面倒をみるのも楽になつた。僕は椅子に座つて、ウサギが雑草をむしゃむしゃ食べたり、ときどき土を前足でがつがつと掘つたりするのをのんびりと眺めていた。

今年の暑い夏も何とか乗り切り、冬は大丈夫かなあと心配していた矢先の死だった。幸い学校が休みだった娘と妻が最期を看取ってくれたので、ウサギも淋しくはなかったと思う。

死ぬ一週間前くらいから、背中中金蠅が2、3匹止まっていた。不審に思っていたのだが、僅かに死臭が漂っていたのを蠅たちは敏感に嗅ぎ取っていたのかもしれない。死ぬ前日には、いつもいるウサギ小屋に敷いているすのこに上手く立つことができず、ラビットフードも食えることができなかった。家族全員が心配していると、性格の悪い白猫のめいも神妙な顔をしてじっと見ていた。娘がりんご

の切れ端を口に持って行ってやると寝たままもぐもぐと食べた。それが最期の食事となった。

その翌日僕が仕事に行っていると娘から「10時10分に亡くなりました」とメールが入った。最期まで面倒をかけずにころつと逝った大した奴だった。

夕方、家の畑をみんなで掘ってウサギを埋めた。大好きな草や祖母が持ってきたラビットフードをいっしょに入れた。埋めた土の上に大きな石を数個立てて墓の代わりにした。

ウサギは犬や猫のように人間とそれほどコミュニケーションできないが、世話をしたりその動きを見たりするとこちらの気持ち落ち着いてくる。11年以上、家という同じ空間にいて、その存在がなくなったということはやはり欠落感のようなものがある。

あのウサギはうちの家で暮して幸せだったのだろうか、ふと思う。

脳脊髄液減少症

この病氣を知ったのは、数年前の新聞の記事からだ。患者さんは中学生の女子だったと記憶しているが、バレーボールのスパイクが頭部に当たり、発病し激しい頭痛、吐き気、記憶障害などの症状に悩まされているとのこと。

脳脊髄液減少症は、上記のように交通事故やスポーツ外傷などにより、頭部や全身への強い衝撃を受けて脳髄液が漏れてしまう。症状としては先に述べたことのほかにめまい、首の痛み、不定愁訴、気力減退、著しい疲労感などがある。

この病氣自体ものすごくしんどいのに、それに加えて外見上は以前と変わらない場合が多いので、「怠けている」などと誤解される二次被害が多い。子どもの場合、いじめや不登校につながるケースも少なくないとのこと。

作家の村上春樹さんが読者からの質問に答える「ひとつ村上さんでやってみるか」にも、この病氣の患者さんからメールがある。この病氣のために恋人と別れ、生きていく上でいろいろな制限があり毎日泣いていたけど、この病とともに生きる決意をし、自分のできることから小さな喜びを見つけていく・・・そのような想いを綴った患者さんに、僕自身、同情もし、感銘も受けた。村上さんの返信メールも優しい励ましに満ちた名文ですので、興味のある人は読んでみてください。

またある中学生女子の場合は、交通事故でこの病氣を発病した。記憶障害がひどく、漢字の読み書きができなくなり、テストの成績も急降下、お母さんのことを「おばさん」と呼ぶこともあったそうだ。親の立場からするとショックだし辛いものだ。また娘さん本人もそのような状況だと不安だろうし、未来が閉ざされてしまった想いを持つのではないだろうか・・・。

現段階での症状改善の有効な治療法としては、患者本人の静脈血

を脳脊髄液の漏れている付近に注入し、漏れの部分を塞ぐブラッドパッチ治療がある。この治療法は公的医療保険適用外のため、1回の治療に約30万円かかる場合もある。全国に30万人もいる患者さんの有効な治療法が、こんな高負担とはおかしいのではないか？早急に保険適用治療として、患者さんや家族の人たちの負担を軽くすべきである。

薬害肝炎訴訟のときも感じたのだけれども、この国の政治を行っている人たちは、本当に困っている人たちを積極的に救おうとしない。財政赤字を理由として、つらい思いをして耐え忍んでいる人々を死ぬまで放置しようとする。国家権力の冷酷さは日常的には実感しにくい。その巨大な権力と対峙して、わかるものかもしれないが・
・
・
・
・

だから僕たちができることは、極めて小さなことかもしれない。けれども正しいと思うことをひとつひとつ積み上げること、正しいと思うことを小さい声でもはっきりと言いつづけることがもっとも大切なことだと思う。

「暴力は親に向かう 二神能基著」の衝撃

この本の著者はあのレンタルお姉さんで話題になった、NPO法人ニユースタート事務局の代表者である。彼は40年以上教育現場でこどもや若者たちと接してきて、現在はひきこもり、不登校、ニートの若者たちの再出発を支援するニユースタートの代表として活動している。

この本を読んでまず驚くのは、家庭内暴力の凄まじさだ。肉体的物理的な暴力の激しさにも唖然とするが、それにも増して精神的な暴力に「正直ここまでやるのか」と息をのんだ。たとえばある若者は自分の母親の髪の毛をバリカンで刈り上げ、モヒカンカット（鶏のとさかのような格好）にし片方の眉毛をそり落とし、なおかつその姿でスーパーに買い物に行かせたというのである。またある母親は日常的に息子に12年間も激しい暴力を振るわれ続けたということだ。そして二神氏はこのような家庭内暴力が現在、日本全国で約20万件存在しているのではないかと推測している。親による子殺し、子による親殺しが日常的に報道されるが、それは上記のような暴力が蔓延して、殺人が発生するその下地がつくられているからなのだ。

二神氏は家庭内暴力が発生するその原因を大きく二つあげている。そのひとつが「友達親子」である。これはいわゆる「親」と「子」の縦の関係ではなく、親子なのに「友達同士」という横の関係だと僕は解釈している。一見子供を尊重しているようなこの「友達親子」は実は大変危険だという。親が子供に自分の価値観を押し付けて、子供が乗り越える壁となることを回避しているのだ。親の最も重要な役割として子供を自立させることがあげられるが、この「友達親子」は親が自分の指針を示すことをせず、子供に反抗期をつくらせず、その役割を放棄している。

以前僕がテレビを見てびっくりしたことがある。ある高校の男子

シンクロの全国大会の様子が放映されていた。まあ、全国大会という舞台なら親も喜んで応援に行くだろうと思う。しかし、この放映された親子は練習中も同じなのである。子供のシンクロの練習に母親は日参しているのだ。そしておやつとかを差し入れて母は喜々としているのだ。今思えば、これは二神氏の指摘している「友達親子」の一例だと思われるが、僕はこの場面を見て異常な違和感を感じたものだ。

家庭内暴力の原因のもうひとつは「勝ち組教育」だ。

「いい大学に入り、いい会社に入社し、出世街道を進む」ことが唯一の道として示される。学校でも家庭でも地域でもメディアにおいても、努力し勝ち続けることが人生において最も大切なことだと耳うるさく叫ばれる。終身雇用制は崩壊し、どんな一流企業でもリストラ合理化が行われる現在においてでも、である。

この「勝ち組」になる道しか選択肢がないように、我々は知らず知らずのうちに刷り込まれている。たとえばあなたの子供が高校受験の際、もうひとつ上のランクの高校へ受験されたらどうですかと教師に言われたでしょう。このことに対し喜ばない親が日本全国にはたしてどれくらいいるのだろうか？と二神氏は問う。ほとんどすべての親が喜ぶのではないかと、それくらい無意識のうちに「勝ち組」路線は我々の中に浸透している。

しかし人は永遠に勝ち続けることはできない。ほんの一握りの人間しかその栄誉を手にすることはできない。誰もがイチローやゴジラ松井にはなれない。

けれども幼い頃から「勝ち組」路線一筋でやってきた人間は、いったんレールから外れると、なかなか他に道を見つけ出すことができない。家庭内暴力を振るう子供は、「勝ち組」路線の途中までは順調に行っていた人が多い。昔の栄光と現状との落差に愕然とし、先が見えない閉塞した状況から激しい暴力が噴出する。その暴力は自分に「勝ち組」路線を巧妙に進ませた親そして家族に向かう。（

もちろん親は子供のために良かれと思つてそうしてきたわけだが）ある男性は東大に入学することしか人生の意義が見いだせなくて、精神病院に入院している現在でも毎日数学の問題集を解いている・
・それほどまでに「勝ち組」になる「東大に入学ということが完全に刷り込まれている」。

NPO法人ニースタートは、ひきこもり解決のために、（もちろん家庭内暴力の解決も含めてだが）専任スタッフを派遣し、ひきこつている人たちにさまざまな場を提供している。それは労働の場であったり、同じような人たちと文化的なイベントをやることであつたりする。それらは、これまで刷り込まれていた「勝ち組」路線とは違った生き方を提示するものだ。（詳しくはこの本を読んでいただきたい）

僕がこの本で一番強く感じたのは、これまで全く知らなかった「家庭内暴力」の凄まじさであり、「勝ち組」「負け組」を言う安易な風潮で、まさに弱肉強食の冷酷な世界を造り上げてしまったこの社会に対する危機感である。僕たちが気付かない至る所で「勝ち組にならないと人生終わりですよ」と囁かれている。それに対し「NO!」と言つことは容易いことではない。しかし、小さな声でも、はつきりと「NO!」言わなければ、それとは違う道を指し示さなければ、この世界を救うことはできないのだ。

薬物汚染の時代―「麻薬脱出」

書評「麻薬脱出」 軍司貞則著 小学館 2001.3.20初版

副題に「250万人依存者の生と死の闘い」とあるが、薬物依存者がこれほど多いとは正直知らなかった。薬物依存者の問題については、夜回り先生こと水谷修氏が著作や講演でその重大さを訴えているが、社会的認知は低い。

薬物依存といえば覚せい剤・シンナーなどを思い浮かべるが、市販の頭痛薬を一気に100錠飲んだりする依存者もいることも、この本で知った。

この本は、薬物依存者の赤裸々なルポであるが、想像を絶する凄まじさだ。薬物を手に入れるために、彼らは人間関係も資産も仕事も、これまで築き上げたものを全て崩壊させる。薬物を使用することのみが、唯一の価値となり、それを手に入れるためには、平気で嘘をつき金を騙し取り、家族や友人に迷惑をかけようがおかまいなしだ。一般常識というものが、吹き飛んでしまう。

薬物依存は病気であり、病気であるならば当然それに対応する治療も必要となる。治療のための民間施設として、「ダルク」といものが徐々に設立されている。このダルクを立ち上げたのが近藤恒夫氏だが、彼も覚せい剤の中毒者だった。

近藤氏の話によると、「薬物依存者のうち、刑務所に約2万人、精神病院に千五百人、全国のダルクに150人しか入っていない」「ダルクを開設して15年、約3万人が門をくぐり、回復した人は3割、1割は死亡、3割は行方不明、残りは精神病院か刑務所」という、なんともすごい数字である。この数字自体、数年前だが、薬物依存者に対する施策が画期的に変わったという話はきかないので、現状もそれほど変わっていないと予想される。

格差社会と呼ばれ、日本の社会の底辺で苦しんでいる人が増大し

ているが、その中でも薬物依存者は最も忘れられた存在ではないのか？

自身もアルコール依存者で近藤氏を救済したロイ神父は、僕らにメッセージを送っている。「神様、私にお与え下さい。自分に変えられないものを受け入れる落ち着きを、変えられるものは、変えてゆく勇気を。そして、二つのものを見分ける賢さを」と。

広告とはるやまのDM、そしてドストエフスキー

僕は基本的に広告というものを見ない。

たとえば新聞の折り込みチラシやインターネット、雑誌に掲載されている広告などほとんど興味がない。ただしテレビのCMだけは例外で見ってしまう。なぜかというとテレビCMは面白く、映像作品としての完成度も高いものがあり、ついつい見入ってしまうのだ。しかしテレビCMに触発されてその商品を購入することはない。

だが妻のように日常品を買う人間にとっては、新聞の折り込みチラシなどの情報は貴重だ。ときどき彼女から「牛乳はササオ力薬局が安いから買ってきてくれ、ティッシュペーパーはどこかが云々」と携帯電話のメールに指示が入り、僕はいそいそと支持された場所に行く。家計を管理している者にとっては、様々な広告の情報が役に立っている。

このように購買意欲の少ない僕でも、必ずチェックしている広告がある。それは何であるか？ それは紳士服メーカーはるやまのDMだ。そのDMの情報でスーツやブレザージャケットなどが、どれだけ安く買えることができるのか知るためである。（なぜ「あおやま」でなく「はるやま」なのかはとくに理由はない）

どうしてこの件だけ広告をしつかり見ているのかというと、僕がお洒落だからではない。それは僕の仕事が一応外回りの営業だからである。

営業の仕事をしている方はおわかりかと思うが、世間一般の常識として、人間やはり第一印象が非常に重要である。（僕は一般常識というものが嫌いだ）そして営業職において、会う人間に不快感を与えないことが最低条件となっている。

そのような消極的な理由であまりファッションに興味がない僕でも、年相応の格好をしていなければならぬ。だからスーツやブレザージャケットがくたびれてくれば、買い換えなければならない。

だがこのような種類の服というものは、動きにくくて汚れやすいくせに、値段が高い！ ような気がする。僕はこういったものにお金をかけるつもりはさらさらない。（けちな性格なのだ）だから一定期間使用に耐えて値段が安ければそれでよい、というあまり志の高くない購買方針を実践している。

余談だが、あのドストエフスキー氏は洋服を新品同様に長持ちさせる技？ を持っていたらしい。服の管理の仕方やブラッシングにその秘密があるらしいのだが……。ついでにこれも余談だが、そのドストエフスキー氏は子どもの前では、いつも糊のきいたシャツにネクタイをしめピシッとした格好だったとか。（家にいるときの話です）彼にとってみれば、フォーマルなファッションのほうが、リラックスできたのでしょね。さすが世界の文豪は違う！

話はもどるが、結局僕にとって広告とは、極めて限定された商品を欲するときだけに、有効に機能するのだ。それ以外のときは、馬の耳に念仏である。（最近はこの馬の耳にも念仏のような気がする）

バレンタインといえばジョニー・バレンタイン

バレンタインと聞けば普通お菓子業界が喜ぶあの日のことだと思われませんが、私は違います。バレンタインといえばジョニー・バレンタイン、往年の名プロレスラーです。

このジョニーさんは筋肉質の体、銀髪、冷酷そうな顔立ちで世界チャンピオンにもなった強者です。必殺技がすごい。肘打ちだけ・・・スタンディングポジションで肘を打ちつけるエルボースタンプとフィニッシュホールド（決め技）であるジャンピング・エルボードロップ（右ひじに全体重をかけて、相手のの下下に肘を打ち下ろす恐ろしい技。本気でやったら、相手は多分死にます）の二つの技しかない。こんなに持ち技が少なくても世界チャンピオンになれるのだから、当時のプロレス界も懐が深い。フィニッシュホールドがエルボードロップというレスラーはあとアブドラー・ザ・ブツチャーくらいだけではないでしょうか？

さて私にとっては「バレンタイン」は「ジョニー・バレンタイン」でしたが、千葉県民にとってはやはり「ボビー・バレンタイン」でしょう。プロ野球、千葉ロッテの名将です。しかし未だに悩むのですが、千葉ロッテの正式名称はマリーンズなのかマリーンズなのかマリーンズなのか??? 謎です。ちなみに阪神タイガースの正式な英語読みは阪神タイガースだそうです。ニューヨークヤンキースもヤンキースだそうです。なんか変です、まあどうでもいい話ですが・・・ところでニューヨークの人が日本人の「ヤンキー」の使い方を知ったら、びっくりするでしょうねえ。ニューヨークヤンキースはつっぱり集団!?? どちらかと言えばMLBのつっぱり集団はボストンレッドソックスだと思えます、そして、ちよび髭を生やした松坂と岡島は国籍不明のアジア系マフィアの使いっパシリというのが僕の印象です。（幹部はもちろんオルティスとラミレスです 2007年当時のこと。ラミレスはドジャースで上手くいくのでしょうか

？)

話がどんどんそれてきたというか最初からそれていますが、そろそろ本題に入ります。 バレンタイン・デイにたくさんチョコレートを貰って喜んでいる男がいますが、本当はどうなのでしょうか？ 私はたくさん貰った経験がないのでわからないのですが、普通の人がたくさん貰ったら困ってしまうのではないのでしょうか？（芸能人やプロスポーツのスターは仕方ないとしても）チョコレートが好きではない人は処分にも困るし。義理チョコではなく、まじめに好意を寄せてくれる女性が何人もいたら、男というものは動揺してしまうのではないのか？それとも困惑してしまうのではないのか？はたまた本心は鬱陶しいのでは？

とまあいろいろ考えてしまうのですが、物事を斜めから見ているようで嫌ですね。若い頃はバレンタイン・デイが来れば素直にドキドキしていたのに、中年のおじさんになればひねくれた見方をしてしまいます。困ったものです。いろいろくだらないことを書いてきて最終的に気付いたことですが、やはりわたくしもバレンタイン・デイにはチョコレートがほしいということです。俗人です。

春の京都は人が多過ぎる 1日目

2008年3月末に家族で京都に行ってきた。僕は18歳から31歳まで京都に住んでいたので、久しぶりの京都である。（18年ぶり！）予讃線、山陽新幹線を乗り継いで、京都駅には午後1時半過ぎに到着。京都駅は変わっていた。しかし、一日目は清水寺に行く予定だった。

京都駅散策は最終日ということで、早速市バスに乗って、いざ清水寺へ出発です。やっぱりというかまったくというか、市バスは混んでおる。バス停から降りて陶器通りを歩きましたが、ここも混んでおりました。そして清水寺に到着したのですが、ここが一番混んでおりました。（当たり前ですが）

中学校の修学旅行で来たときは、こんなに人がいなかったのに・・・あれから30数年、世界遺産に登録された清水寺は金閣寺と並ぶ超人気スポットになっていた。ところで、清水の舞台とされる所が2箇所あり、妻といったいどっちが、あの有名な清水の舞台なのか協議をかさねたのですが、結局わからなかった無知な夫婦です。

いっぽう中二の娘は人が多過ぎる！とキレかかっていました。人に酔ってしまった田舎者のわたくしたちは、一刻も早く人ごみを抜け出そうと、運良くやって来た京阪バスにいそいそと乗り込み四条河原町に逃げ込みました。（京阪バスは異常に空いていた、なぜ？）「夕食は河原町で食べるのだあ！」と意気込んだのだが、考えてみると僕は河原町界隈をあまりよく知らない。大学時代、衣笠方面に生息しており、働き出してから宇治方面を主なテリトリーとしていたので四条河原町のようなちゃらちゃらしたところは興味ないという縁がない。

あれこれ探すのも、めんどくさいので阪急ビル7階のレストラン街でオムライスを4人で食したのだ。店の名前は忘れたが、やたら

隣のテーブルが近い店で、味の方は美味しくもまずくもなく、なぜかウエイトレスさんはやたら若い。味に関しては宇和島市の本町追手（だったかな？銀天街を上りきったところ）にあるメールというレストランのオムライスの方が断然美味い！（ここはサラダも食べやすいし、ライスグラタン・ドリアも美味しい）

それでも我々は空腹だったので、注文したものは全部食べて、1泊目のホテル、タワーホテル・アネックスへタクシーで移動した。ホテルアネックスについては、とくに書くべきことはない。あえて言えばシャワーバスが小さい。それからシャワーがえらいレトロで（金具でシャワーを引っ掛けているし）使うときに少し緊張したくらい。そうそう、夜中に3回救急車のサイレンを聞きました。娘は明け方、おばあちゃんの寝言をたくさん聞かされ、びっくりしたそうなのな……

こうして京都旅行の1日目が過ぎていった。

春の京都は人が多過ぎる 2日目

今日は太秦映画村に行く日である。

僕は学生時代、太秦に下宿していたが、太秦を「うずまさ」とは最初読めなかった。「たいしん？ 何じゃこれは」といった感じである。学生時代はあまり観光には興味がなく、当然映画村にも行っていない。娘が面白そうだということで、それではまあ行ってみますかといった雰囲気ですケジュールを決めたわけです。

市バスは混むし時間道理運行されないなので、今回はJR京都駅から山陰線で花園駅下車、そこからタクシーで10分弱の行程です。

映画村の時代劇セットはあまり興味がなかったので適当に見て、日曜日なので催し物中心に見て回ったのだ。

とても面白かったのは忍者ショーで、入材料の2200円の元は取れたと思うくらいである。舞台で6人くらいが殺陣を繰り広げるのだが、宙返りをしたり、高いところから落ちたり、早替わりをしたり、演出も結構凝っていて大人でも十分に楽しめる内容だった。20分ちよつとの活劇だが、映画村に行く人は要チェックメニューです。その他、テレビの演出効果を楽しく案内する出し物もあり、これもなかなか面白い。

昼食は施設内の食堂でとったが、まあこれはどこも同じようなもので、腹の足しにはなつたくらい。（ウェイトレスが1000円多くレジ打ちしたぞ！ 妻の指摘で取かえしたけど）

雨が降ってきたので午後2時くらいには映画村を後にし、2日目の宿泊先、ホテルレジーナに移動した。ホテルレジーナは堀川今出川東入る、そして少し下がった場所にある健康に配慮した施設である。ここはロビーも部屋も広く値段もリーズナブル、食事も美味しいというなかなかのホテルです。

夕食まで時間があつたので、徒歩10分で行ける西陣織会館に着物ショーの鑑賞も含めて出かけていったわけですが、そしてそこで

遭遇したものは、中国人観光客の大群であつた！ 観光バスが何台も連なつてパワフルな中国人を大勢連れてきた。西陣織会館は中国人のみなさんに占拠されたのだ。トイレの説明書も中国語だった。私の母などは、周りが全て中国語なので、自分はこのまま何処かへ連れて行かれるのではないかという、訳の分からない不安に襲われたそうです。 わたくしは中国の人たちのパワーを肌で感じ、21世紀はやはり中国の世紀だと実感した。（それとインド？）市場開放政策で、現在いい面も悪い面もいろいろ出ているが、実際に中国の人たちに遭遇してみると、ともかくこの国はいま高度経済成長の真っ只中にあるのだなど、理屈ぬきで感じてしまう。

2日目は忍者ショーとチャイニーズパワーに圧倒された1日でした。

それからホテルレジナの夕食はとても美味しくいただきました。刺身もてんぷらも焼肉もとても食べやすく、妻などはもう1日、このホテルに泊まりたいと言っておりました。（最終日に続く）

春の京都は人が多過ぎる 最終日

今日は旅行の最終日です。

午前中に円山公園のしだれ桜を見て、その後京都駅でお土産を買うこととした。

ホテルレジーナからタクシーでいざ円山公園へということで、タクシーに乗り込んだのだが、このタクシーの運転手が話し好きだった。桜の名所をいろいろ教えてくれたが、岡崎の平安神社とか琵琶湖疎水端がよいときりに言う。そして何を思ったのか、平安神社の赤い大きな鳥居前で、「ハイ、着きました」と意味不明のことを言う。「あのー、円山公園なんですけど」と言うと「ありゃー、そうじゃたねえ、ついつい桜の名所ということ、平安神社に来てもうた」とのこと。かなり思い込みの激しい運転手さんであった。

どうして円山公園に来たかという、しだれ桜を見たかったからです。ガイドブックにも見事なしだれ桜の写真が紹介されていたので、期待に胸を膨らませてその場所に着いた。が、「？」なのである。祇園の夜桜として名高いしだれ桜がこれ？ 桜の花の量が写真の3分の1くらいしかないんだけど・・・娘いわく「疲れた中年のおっさんのような」元氣のない桜の木が目の前にあつた。またしても、ガイドブックとは違ふところへ来てしまったのかと疑惑が湧いてきたが、他の人もここで記念撮影をばちばちしているの、どうやらこの目の前の桜で間違えはなさそう。近づいて桜の枝を見てみると、満開とはいえないが八分咲きくらいではある。「るるぶ情報版・京都ベストテン」の写真はいったい何だったのでしょうか？ 謎は深まるばかりです。

円山公園は花見の名所なので、明るいうちは若干盛り上がりにかけるようで、さっさと京都駅に向かいました。女の人たちは（母・妻・娘）は買い物にいそしんでいたが、（漬物のお店がやたら多い）僕はほとんどお土産を買わない人なので、書店でカミュの「ペスト」

という本だけを買って京都記念としました。ところで僕の奥さんは「西陣織会館では400円だった小物が、同じようなものがここでは700円する」といって半ばあきれ、半ば面白がっていた。いったいどのような流通経路になっているのでしょうか？

ともかく無事に自宅に戻ったのが午後七時前、2泊3日放置された性格の悪い雌猫は「みやあみやあ」鳴きつつ、家族の者に甘えておりました。よく見ると餌が全く減っていない。顔も若干やつれた感じ。この猫は家の人間が誰もいなくなったので、びびりまくり食事どころではなかったようです。「ヘタレー」という意見と「案外繊細なのねえ」という意見とありましたが、ストレスのため襖をガリガリ引っ掻いて破っていることに関しては非難が集中しております。

こうして春の京都の旅は無事幕を閉じたのです。

節分の豆まきについての若干の考察

今から40年くらい前の話だが、実家での節分の豆まきに小銭やお菓子が入っていたような記憶がある。

僕は三人兄弟の次男だが、男の子三人が小銭ほしさに争奪戦を繰り広げたわけだ。その中に50円硬貨がたまに混ざっていて、あさましい我々はそれほしさドタバタ走り回っていた。現在の子どもにとつて50円がいかほどの価値があるかわからないが、一般的に考えて、どたばたと争奪戦をするとは考えにくい。昭和40年代のころにとつてみれば50円は大金であつたような印象を持っている。我が家ではこのような豆まきだったので、豆自体は全然人気がなく、「歳の数だけ豆を食え！」と言われても「ちえ・・・」といった反応である。なんとなく節分の趣旨からはずれたような豆まきだが、今でもそんな豆まきをしている家はあるのだろうか？

最近は豆まきといっても、我が家のこどもも大きくなりそれほど喜んでくれない。だからアリバイ的に「鬼はそと！」と玄関からちよつとだけ豆まきをして、歳の数だけぼりぼりと各自が豆を頼張るのである。歳を重ねると、炒った豆の香ばしさは食欲をそそり本当に歳の数だけ豆を食べてしまう。そのあと、「食べ過ぎたーあ」と若干後悔するのだが、節分の決まり？　なのだからしょうがない。

ところで以前飼っていた雑種のオス猫のマルは、なぜかこの豆が好きで「ぼりっぼりっ」と食していた。家族のみんなも「へえー、猫って豆食べるんだ」と妙な感心をしてしまった。今飼っている二匹目のメス猫メイは性格にかなり問題があるので、豆なんか「ふん！」といった感じで一蹴されるような気がする。でも先日なんと輪ゴムを「うにやうにや、ごつくん」と食べていたところを目撃した。悪食ネコなので、節分の豆も「ばーごばーご」と噛み砕いて食べてしまうかもしれない。

06 WBCの主役はデービットソン審判だった

2006・WBC、君はデービットソン審判を覚えているか？

目立ちたがり球審のため（デービットソン審判のことです）、日本はアメリカに判定負けということで、「リベンジを誓う王ジャパン！」とマスコミは報道しているが、果たしてどうなるのでしょうか？（対アメリカ戦、西岡がタッチアップでアウトにされた件です）それにしても、あの誤審を見た後、僕はテレビのチャンネルを切ってしまったが、それほどあの審判の行為が不快だった。

スポーツはフェアプレイだから、見る価値がある。その前提があるから、ファインプレイや緊迫した攻防に興奮するのだ。

アメリカはベースボール発祥の地なので、ぜひとも優勝せねばならん！ ということは分かるが、そのために何をしてもよいことにはならない。湾岸戦争以降、アメリカはいろんな面で余裕がなくなっているように見える。超大国の威信がいろんなところで揺らいでいるので、文化・スポーツにもマイナスの影響が出ているのだろう。アメリカにとって2次リーグ敗退した方がいいのかもしれない。何でも世界一になれるわけではないのだから

今大会のMVPは審判のデービットソンに決定！

凄すぎるジャッジメントに脱帽です。日本対アメリカ戦のみならず、メキシコ対アメリカ戦でも強烈な一発が飛び出しました。

メキシコの打者が打ったライトポール直撃弾は、誰がどう見てもホームラン。それを2塁打にしてしまう力技には、もう誰も勝てません。この回、メキシコはタイムリーヒットが出て1点入ったのでよかったものの、もしこれが無得点だったらアメリカが勝ったかもしれない？？ そう考えると、このデービットソンさんはなんて恐ろしい審判なのでしょう。アメリカが優勝候補の本命の理由とは、こ

の隠し玉を持っていたからなのですな。

ところで、日本がからくも進出した準決勝、最大の敵は韓国の強力な投手陣ではなくて、コービットソンさんに決まっています。しかし、果たして彼はこの試合に出場するのでしょうか？ 一説によると彼は相当な目立ちたがり屋らしいので、「俺が！ 俺が！」と出てくるかもしれません。こうなると彼に対抗できる人間はイチローしかいません。メジャーのスーパースターの貫禄で、マイナーの審判を視殺するしかありません。でももしかするとアジア人同士の対決は、興味が湧かないもん！ とか言って、出て来ないかもしれません。……（個人的には出てきてほしい気もしますが……

）
いずれにせよ、いまいち盛り上がらなかったこの大会を一番盛り上げたのは、デ・ビットソン――！

パソコンで打ったら「デ・ビット損」と変換されました。一番損をしたのは、やっぱりアメリカ！？

瀬尾まいこ、辻仁成、アレルギー体質

瀬尾まいこの「優しい音楽」を図書館で借りて読んだ。なぜ借りて読もうかと思ったというと、表紙の絵が素敵だったからである。ちなみに装画の作者は金子恵さんという方である。

この本は3話の短編から構成されているが、それぞれの話は独立していて関連はない。個人的には3話目の「がらくた効果」が一番気に入った。同棲している女の子が元大学教授で今はホームレスの男性を連れてくる内容だが、妙にリアルである。2話目の「タイムラグ」は不倫相手の娘を預かる話で、表題作の「優しい音楽」は家族の死にまつわる話でもある。

それぞれのテーマは重くて深刻になるうるものだが、それを日常生活レベルでさらりと処理しているのが、この作家の力量なのだろう。文章自体も読みやすく、作者はすいすいとペンは走らせている（あるいはキーボードを叩いている）印象を受ける―あくまで僕の勝手な想像です……。日常生活のバランスをとるには、なかなかよい本で、図書館にもまだ数冊あったので、今後、読破したい作家さんの一人となりました。

辻仁成は知人がファンだということで、またまた図書館で借りてきた。仁成は「ジンセイ」と読むのか「ヒトナリ」と読むのか謎であったが、「ヒトナリ」であった。僕の世代では辻仁成は中山美穂の旦那というイメージが強い。どうでもいいことだが。（奥さんもそういう理解をしていた）「オープンハウス」も3話で構成されているが、1話と2話は物語の続きという感じで3話はその番外編といった感じです。

最も印象に残ったのは、3話の主人公の女性のじんましん体質の描写である。一種のアレルギー体質だが、じんましんというのは本当に大変なのだなあとしみじみ思う。もちろん作者はじんましん体質が大変だあ！ ということを書いているわけではないのだが、私

の感想はそうなのだ。

実は僕もアレルギー体質で、急性副鼻くう炎、中耳炎、気管支喘息（今も薬を噴霧している）アレルギー性鼻炎などなどの病歴がある。僕の喘息発作は医者によると中の下くらいの大したことはないらしいのだが、本人にとっては死んでしまうのではないかと感じるくらい辛かった。（もつとも点滴で直るくらいなので、たいしたことはないのだろう？） だからアレルギー体質の人に対する共感は当然強い。

ところで僕がもつともアレルギー体質の大変さを感じた本は稲泉連の「僕らが働く理由、働かない理由、働けない理由」だ。第3章「すべてを音楽にささげて」で登場する健二君のアレルギー症状彼の場合はアトピーなのだが、これが凄惨の一言に尽きる。生死に関わる重い問題だ。肉体が崩れていくという文言があるが、まさにそのとおりの症状なのだ。このケースを読むとつぐつぐ人間の体というものは、微妙なバランスで成り立っているものだなと思う。書評もどきを書こうと思ったら、途中でアレルギーの話になってしまったが、たぶん私はこういう人間なのでしょう。

永遠に続く仕事は家事

結婚した当初から共働きだったので、家事は分担していた。だからといって家事が好きかといえばあまりそうではない。自分でも結構頑張っているつもりでも、冷静に考えてみれば7対3の割合で妻の方の負担が多い。これは彼女が大体夕食をつくっていて、その負担が大きいと思っている。

僕は最近しみじみ思うのだけど、毎日毎日よく夕食をつくれるものだ！と。もし自分が毎日夕食をつくれと言われても三日もたないような気がする。冷凍食品を電子レンジでチンするとか、インスタントラーメンなんかだと続くと思うが……

だから我が家では食事をつくった人間はそのあとの食器の洗い上げは免除なのである。しかし今は食器洗い機という文明の利器があるので、この作業はかなり楽チンなのだ。

ところで家事というものはいろいろ種類がある。当然、比較的好きな家事とできればやりたくない家事が存在する。

たとえば洗濯物を干す作業は結構好きなのだ。天気の良い日に、下着やシャツ、タオル、ズボンなどの衣類を干すという行為はなかなか精神的にも生理的にも気持ちがい。けれども洗濯物を取り込む作業はどうも好きではない。洗濯物を取り込んだときに洗濯かご一杯に乾いた洗濯物が溢れる状態がなんか嫌！である。（明確な理由はない）そしてその後、それらを畳む作業も好きではないのだ。（畳むことが面倒臭い）だけど洗濯された下着やシャツ、靴下、ハンカチなどを自分の箆笥にしまい込むことは好きです……（所定の場所にそれぞれの衣類が納まるのがよい）

また掃除機をかける作業はなかなか面白い。中程度の吸引力では吸い込めないゴミも強にすればスポツと吸い込まれると快感なのである。だけど部屋には家具やいろんな物が置いてあるので、それらを撤去したり移動させるという作業は面倒臭くてできればやりたく

ない。だからときどきそれらを移動させずに、空いているスペースだけ掃除機をかけたりする。しかしそういうときに限って妻は「ちゃんと掃除機かけた？」と疑惑の目で僕を見たりする。主婦の勘、あな恐ろしや！ 恐ろしや！（僕の住んでる地方では『おつとろしあ』といいます）

風呂洗いは大体お風呂好きの僕がやるのだが、これもかなり適当である。大き目の風呂洗い用スポンジに風呂洗い用洗剤を染み込ませて、浴槽を洗うだけで済みます。ときどきブラシを使って、水垢で茶色くなっているところをゴシゴシこする。時折、排水溝にたまっている髪の毛、体毛？ 猫の毛の塊を処分する。（うちの猫は外出後に必ず足を洗われ、体を濡れたタオルでゴシゴシされる。猫を拭いた猫用タオルはすぐれるので、猫毛もながされるわけだ）ところでシステムバスは換気を頻繁に行ってもカビてしまうものである。

洗い場の床に黒いカビがぼつぼつと増殖するのだが、僕は時折、湯船に浸かりながらブラシでゴシゴシとこのカビを擦り落したりしている。こういうときの心境というのは何なのだろうと思うが、よくわからない。湯船に浸かって気分が良くなったためだろうか、それとも僕がキレイ好きだからだろうか、それとも運動不足解消のためだろうか……

いずれにしても家事は奥が深い？

最終章 星明かりの夜に

星明りの夜に（限界集落に住む）

僕は夜ときどき散歩をする。メタボ対策のためには、本当はジョギングすればよいのだが、元来怠け者の僕はのろのろ歩くことが多い。（たまに数十メートル走って満足してしまうのだ）

僕の住んでいるところは四国の山奥で標高200メートル以上の集落だ。夜になると昼以上にひっそりとしていて、散歩をしているのも街灯が薄ぼんやりとした光を落としているだけ。都会のように人工の光が溢れていないので、澄んだ空気の中、星がよく見える。

月の出ていないある夜、暗い道を歩いていると、気づいたことがあった。空を見上げると険しい山々は真っ黒なのだが、夜空は星明りで山よりも薄っすらと明るい。山の深い黒よりも空は僅かに白っぽい黒なのだ。こんな光景を楽しめるのは、山奥に住んでいる特権だろう。

だからといって僕の住んでいるところが住みやすいといえば、そうではない。平成の大合併で村が町に吸収されてから人口減少は凄まじい。3年前の合併時には1800人余りいたのが現在では現在では約1630人……。地元で働いている友人の実感では実数としては1500人を切っているのではないかということだ。村役場がなくなると、その周辺の商店は一気に減少する。診療所も入院施設は廃止され、高校の分校も募集停止となった。共同体として辛うじて機能しているが、様々なところでほころびが出てきている。そして、一番問題なのが、そこに住む人たちが「寂れるのは仕方がない」と諦めていることなのだ。（僕も含めて）

おそらく日本全国のほとんどの田舎が同じような状況だと思う。田舎はますます過疎に拍車がかかり、都市部とその周辺は相変わらず

ず人が増えていく。僕はもともとこの地域の人間ではないので、正直現状に対してそれほど深い思い入れはない。現実問題として果たして今後、今住んでいる所で住み続けていられるか？ という危惧があるだけだ。しかし、それでも今進んでいる事態はおかしいのではないかと思う。森林や田畑を抱える生産拠点である上流域が解体すれば、もっぱら消費専門の下流域（都市部）はちゃんと機能するのだろうか？

世界はますますボーダレスになっているような気もするし、その反動で保護主義的な色合いも浮かんでいる気もする。はたして円やドルでずっと外国のモノを買うことができるのだろうか？

わからない。

そして僕は10年後、いったいどこにいるのだろうか……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2173f/>

日々、頭に浮かぶ世界の風景

2010年11月13日11時33分発行